

「元気が一番」塾

2007.11.17 仲島 正教

1. 研究授業は、授業力を伸ばす絶好のチャンス。

- ・ 授業力を高めるには、どれだけ研究授業を行ったか、である。
- ・ 授業を見てもらい、批評してもらい、そして力がつく
- ・ いい授業を何度も見て、自分用に加工していく（いい授業は何があっても見に行くこと）
- ・ 授業力に終点はない。退職するまで勉強する教師に！
- ・ 授業力のある教師は、子ども理解も学級づくりも優れた教師になっている。

2. 授業研究会の持ち方。

- ・ 授業研究会は司会者にかかっている。今日は〇年が司会、と輪番制にしているのはダメだ。
「まずは授業者からどうぞ、次は一人ひとり感想を述べてください・・・」こんな進め方は最低。
テーマを決めて、焦点を絞って、内容の濃い討議にする司会者が必要。
- ・ 「切磋琢磨」こういう研究会でないとみんなの力量はあがらない。きついことを言うと授業者が傷つく、そんな甘さが結局その先生をダメにし、傷つけてしまう。授業の下手な先生に子どもはついてこないのだ。
- ・ 若手が発言する研究会は、活気が出てくる。そして基本的なことも再確認でき、どう改善していけばいいかわかりやすくなる。若手が発言することによって、ベテランの力も伸びる。

3. 学習指導案をしっかりと書ける先生になること。

- ・ たかが指導案、されど指導案。指導案をしっかりと書ける先生は、授業は必ず上達する。
- ・ 指導案を書くのは1年間にせいぜい1度か2度、その時ぐらいいは時間をかけて必死で取り組む。
- ・ 人の指導案をどう読み取るか。展開部分より、一番大事なのは「趣旨」。ここに教師の姿勢が見事にあらわれる。人の指導案を批判できる先生になること。
- ・ こんな子どもだから（児童観）こんな教材をつかって（教材観）こんな指導をしたい（指導観）
- ・ あの子の顔を思い浮かべながら、書いていく。それが私のクラスの指導案になる。

4. 研究授業その他あれこれ・・・

- ・ 参観者の椅子は、教室の横側に並べて子どもの表情もみてもらう。本当は立って見る方がいい
- ・ 教室のそうじはきちんとする。汚い教室の教師の授業は、なぜかよくないことが多い。
- ・ 研究授業を見に行く時はその教室に5分前に入っておく。自分の学級の自習は早めに準備する
- ・ 隣のクラスで試しの授業をするのは、あまり意味はない。だって子どもが違うのだから。

5. 大川知子先生（川西市加茂小）の指導案をどう読むか

- ・ 2学期算数の指導案と3学期国語の指導案の違いを比べる
- ・ 趣旨は、児童観→教材観→指導観 が一本の筋でつながっているか
- ・ 大川先生がこの授業で、したいこと、子どもをどう育てたいか、書かれているか

★ おまけ 12月の個人懇談の持ち方 通知票（あゆみ）の所見の書き方